

## ちょっと一言

「ちょっと一言」は学会の見解を掲載する欄ではなく、国内外の情報の紹介や日頃考えている事柄などを個人の責任で自由に投稿できるコーナーです。

### ドバイについての報道に、ちょっと一言

湾岸 太郎

5年目に入った中東から、2009年1月22日付けの「ちょっと一言」をお届けします。

今や日本の報道では「凋落の一途」、そして「それ見たことか」という印象が強いドバイです。そのドバイに関する最近の日本の報道が余りに意図的に悪い面のみを強調し過ぎているあるいは意図的に悪くとらえ過ぎているという趣旨の主張が某雑誌に掲載された。これがドバイ在住の日本の人々の間で「よくぞ書いてくれた。」と大評判になっている。

ドバイの邦人企業は、それぞれ本社から「ドバイはどうなっている。これからどうなるのだ。」と矢の如く問い合わせが来ている。これに対してドバイ側からは「短期的には金融危機の影響が出るのは当然で、世界のどこにも例外はない。ドバイは、原油やガス収入を基礎とした経済基盤を持つ湾岸諸国内に位置している。さらに、既に物流の世界的な拠点、それも圧倒的な存在感を持つ拠点となっている。この強みを基礎に中期的には復活する。日本の報道は行過ぎです。」というように回答をしている。私も同じ意見です。あまりに酷いと感じる日本の報道振りが多くなってきている中で、今回の論調は、我々ドバイの日本人には心に染みる一刀でした。

ドバイが属するアラブ首長国連邦(UAE)の人口は650万人です。うちUAE人は15%で、つまり外国人労働者が85%です。外国人労働者が多いということはリストラがしやすい環境にあるということでもあります。日本などでは進めてしまっているプロジェクトの中止や人員削減などは、簡単には出来ない状況に直面しているのではないのでしょうか。ところがここドバイでは、そうした調整はいとも簡単にやってしまう。プロジェクトの中止や延期も他のどの国よりも大胆に実行する。これは、ドバイの各企業がスリム化し体制を立て直すまでの期間が非常に短くて済むことを意味しています。UAE以外の湾岸産油国もUAEほどではないにしても外国人比率が高く、苦境を乗り越えるまでの期間が短くて済むのは同様です。

このように各国には各国の事情があり、それぞれの社会にはそれぞれの社会の特徴がある。こうした点をしっかりと見ていくことが重要だ。そしてこういう時こそ、こうした地に足のついた見方を基に、何か応援できるメッセージを携えた主張が出ることを望みます。そうしたことが、国としての品位というものにつながるのではなからうか。